

日韓ジョイント教育に参加して

<日本側>

王 冲（お茶の水女子大学大学院）

今回、私は初めて海外の大学院との共同授業に参加した。共同授業を通じて、母国の中国における日本語教育の過去、現在、未来をより一層客観的に見直すことができ、日本、韓国、台湾などの国と地域における日本語教育の状況を知ることができ、広く意見を仰ぎ、大変貴重な経験になった。

中国、韓国、台湾において、それぞれの歴史と文化があるが、これらは日本語教育の背景になると思われる。グローバル化時代における日本語教育を考える場合、その背景にある歴史、文化などを配慮しなければならない。今回の授業は歴史、文化などの内容が取り上げられており、形式は発表、質疑応答、ディスカッションで行われた。韓国、中国、日本の間には、歴史問題について明らかに問題意識に差があり、お互いに考え合えることができた。これは日本では得ることができない成果である。

日本語教師になろうとしている私は、共同授業を受けて、グローバル化時代における日本語教育のあり方、海外で日本語教師になるための努力などいろいろ考えさせられた。とても有意義であった。

これからも、中国などの海外の大学院との共同授業を期待する。機会があれば、ぜひ参加したいと思っている。

孫 愛維（お茶の水女子大学大学院）

2月6日から12日までの期間、日韓合同セミナー、韓国日本語教育学会に参加する形で、韓国で様々な体験をし、多くのことを感じたり学習することができて、非常に楽しい期間であった。有意義に過ごすことができたことをこの研修に関わった全ての方々に感謝している。この研修プログラムを修了して、韓国に対する見方や考え方が韓国に行く前までとは、かなり異なるものになったことは確かである。身の回りに韓国出身の留学生がいるが、実際に韓国に行ってみると、自分の中でこれまでよりも韓国との距離が近くなったような気がする。以下に簡単に今回の経験を通して私が感じたことを整理したい。

「歴史とは何か」という本の中に「歴史とは、過去と現在との対話である」という言葉がある。歴史はただ昔発生したことだけではなく、それを理解することによって、現在の人々に知恵を与えてくれるものだと言われている。「歴史との対話」を成立させるための唯一の方法は、一生懸命、過去に存在し、行動し、発言した事柄を記録、積み重ねることだと思う。例えば、「慰安婦」の問題について、過ぎ去ったこととして見なされるのではなく、真相を後世に伝えるべきだと思う。それによって、誠意を持って解決策について取り組むことが可能であろう。勿論歴史を一面的に解釈して恨み、辛みを執拗に控訴するような醜態及び愚行は慎むべきだと思うものの、過去は過去だ、すでに過ぎ去ったことだと「歴史との対話」を拒否する如き冷酷、幼稚な態度は許せないと思われる。そんな先入観、偏見を持って語られた歴史は退屈でうんざりするものでしかない。韓国人が「旧植民地時代」における出来事について、詳細に探求することは日本に対する敵意を持っていることを示すわけではなく、歴史に学んで新しい知識や見解を得ること、未来への教訓となるものを汲み取ることである。それが人間の営みにとって重要であることは、いわずして明らかである。自明のことではあるが、人は時間の流れの中で生きている。過去から未来へと経過していく時間の流れの中に現在の自分がある。過去がなければ、現在の自分も存在せず、未来もないと思う。過去を知ることの重要性が、そこに浮き彫りにされる。

また、歴史を理解することによって、文化の交流など順調に行うことができると思う。勿論、交流する前「あの人は〇〇人だから、」とその人の行動様式を紋切り型に決め付けるのは問題がある。しかし、少なくとも交流する相手が自分と異なる出身の人ならば、話題は自ずと出身についてのこととなった。相手の育った文化土壌、歴史などを知ることによって、交渉を深めることが可能である。

最後になったが、今回の研修で同世代のよき友に多く出会って、自分にとって大きな収穫であった。今後様々な体験を積み重ね、多くのことを考え続けていく過程で、少しずつ実感されていくのだろうと思う。

高橋 薫（お茶の水女子大学大学院）

近年、日本では韓流ブームが追い風となり、個人レベルでは日韓の交流が進んでいる。しかし国家レベルの話になると日韓関係は決して良好とは言えない状況が続いている。「グローバル時代の日本語教育」と銘打たれ今回の研修であるが、日本語教育とグローバル化ということばが結びついたときに、そこには何かしら微妙な緊張関係が生じる。日本で日本語教育をしているだけでは、このような緊張関係を実感することは少ないが、ひとたび日本を離れてみると、日本語教育は過去の歴史と切り離すことができないということを痛感する。

たとえば、こんな出来事があった。同徳女子大との合同授業で、院生同士がディスカッションをおこなったときのことである。日本語教師でもある韓国人学生が、次のようなエピソードを語ってくれた。彼女が日本語の授業で、「蛍の墓」という日本のアニメを学生に見せたときのことである。「蛍の墓」は野坂昭如原作の戦争体験を描いたアニメーションで、幼い兄と妹が戦争で親を亡くし、苦労の末に妹が生活苦から命を落としてしまうという戦争の悲惨さを描いた映画である。このアニメを見ていた学生が、授業中に突然怒り出したのだという。なぜなら、この学生は、「蛍の墓」を日本政府による一種のプロパガンダであると捉えたい。映画を通して戦争体験の悲惨さを描くことで、日本が被害国であることを強調し、過去の過ちを正当化しているというのがこの学生の主張である。

この話しを聞いたとき、私は少なからぬ衝撃を受けた。日本人学生にこの映画を見せたとしても、日本が過去の過ちを正当化する映画だと捉える学生はおそらく少数派であろう。しかし、コインの裏表のように、ひとつの事象も見る視点を変えると、全く別のものとして解釈され得るのである。今回の経験を通して、自分自身は過去の歴史認識についてあまりにもナイーブ過ぎると実感した。対話を通して共通認識に至るのは理想論と言えるかも知れない。しかし、彼らと同じ土俵にたつて議論するためには、単に意見に耳を傾けるだけではなく、なぜ彼らはそのように考えるのかという思想の背景を知る必要があるだろう。お互いがお互いのことに関心を持ち、複眼の視点を持って物事を捉える、そんな小さな積み重ねが双方の対話の糸口になると信じている。

張 瑜珊（お茶の水女子大学大学院）

日本に入学して以来、自分は日本の大学の学生として、海外へ交流しに行く、あるいは合同授業を受けに行くとは想像もできなかった。留学生としての身分は大学の国際関係の事業とは無縁の関係だと思っていたからである。今回のプロジェクトに参加することができて、とてもうれしかった。

海外へ行って、久しぶりの異文化体験をした。5年以上の日本滞在上、日本に関しては異文化という要因から受けたインパクトがすでに薄くなってきた。しかし、今回、韓国に到着した瞬間、すぐその言葉が通じなく、右か左か方向を失う無力感を再び経験した。留学生・外国人が異文化での心境を常に心に置かなければいけない日本語教育を勉強している私にとっては非常に刺激を与えられた。さらに、韓国で日本語教育を勉強している人達との交流で、まず現地の日本語教育事情を知ることができ、韓国の日本語教育の内容も概観することができた。そして、海外の日本語教育という立場の初心に戻ることができた。ずっと日本にいたため、日本の立場から日本語教育を考えることしかできなくて、その間のギャップを知ることもできなかったからである。

それぞれの国の日本語教育事情と将来の日本語教育像に関する授業の内容は展開されていた。教師の教授テクニックに代わり、日本文化はどう扱うか、日本と韓国の歴史問題、日本語教師が求められている能力は何か、について新しい観点到に触れることができた。今まで、自分の母国と日本の関係だけ注目してきたが、アジアは共同体という認識が合同授業を通して始めて認識した。これから自分の視野をもっと広げなければならないと思っている。これこそ今度の合同授業の一番収穫だと考えている。

林 美琪（お茶の水女子大学大学院）

日本語教師として、今回の日韓共同セミナーに参加することができ、大変よかったですと思います。いちばん印象に残ったのは慰安婦施設「ナヌムの家」に訪問したことと、初日の総括として双方で討論した「歴史問題」でした。

今回の参加者は日本語教師か、これから日本語教育に携わる人がメインとなっているため、日本語教師の立場で見る歴史問題、特に「靖国神社」についていろいろな議論が交わされ、とても意味深い討論会だと思いました。

このディスカッションで私がいちばんびっくりしたのは、同じく日本に侵略された歴史を持つ中国、台湾または韓国と

いう3カ国は、日本という国または日本人に対する感情がそれぞれ違うということでした。去年、中国で反日感情が起きていたことや「竹島」問題に対する韓国民衆の反発などの出来事は、台湾人の私にとって理解しがたいところがたくさんあります。何故かという、これらの問題は戦争が終わってから長い年月を経ても、今まだ解決されていないからです。同じアジアの国として何故仲良くできないのであろうかという違和感さえ覚えています。

今回の共同授業で私なりの国際観を出しました。自国の歴史を認識したうえで、相手国のことを理解することです。それができないと、真の国際人といえないでしょう。

文 鐘蓮（お茶の水女子大学大学院）

今回、韓国同徳女子大学との共同授業への参加を通じ、大学での普段の授業では滅多に勉強できない大変貴重な内容を学ぶことができ、自分の視野が急に広がったような気がして、このような機会を提供してくださったお茶の水女子大学の森山先生及び韓国同徳女子大学の李先生に心からの感謝の気持ちを表したいと思う。またこのような機会に恵まれたことに対する嬉しい気持ちは言葉では表しにくいものである。

今回の日韓共同授業では主に日本、韓国、中国及び台湾などで行われている現在の日本語教育を中心としてお互いに様々な討論を行っただけでなく、日本と中国、韓国及び台湾などとの歴史的な問題も主な内容として各自激しい討論が行われた。

悲惨な戦争が終わって既に半世紀が過ぎているが、過去の歴史問題はまだ残されている重要な課題であるため、それは私の力ではどうすることもできない、私たち個人とは距離のある国レベルの問題だと思い込んでいたが、今回の交流を通じ、はじめてこれは国と国との問題だけではなく、私たち一人一人の正しい認識を通じて解決していかなければいけない問題だということを初めてまじめに考えるようになった。

今回の共同授業で得た成果は、今後の日本語教育の現場で大変役に立つと思われる。現在まではただ名前通りの日本語教育だけに力を入れてきたが、今後からは更に視野を広め、両国の歴史、文化などを中心としたもっと広い範囲での日本語教育をしていかなければいけないという「使命感」をつくづくと感じるようになった。

河先俊子（お茶の水女子大学大学院）

1) 海外の大学院とのジョイント授業について

とても密度の高い、心に残る交流ができる方法だと思いました。今回のジョイント授業を通して学問的にもいろいろ考えさせられ、刺激を受けました。「日本語教育」という共通分野の学生が集まり、それぞれの意見を自由に述べたり、質問できたりするという雰囲気が良かったのだと思います。また、授業後に設けられた食事会などの場で、研究者と目指す者として、また女性として共通認識を確認できたことによって、同徳女子大学の学生さんたちをより身近に感じることができました。

2) 授業の内容について

自由に何でも話せる雰囲気は良かったと思いますが、もう少し全体としてのストーリーがあった方が良かったような気がします。例えば、歴史問題に関して、文化交流に関して、グローバル化に関してなど、あらかじめテーマを少し絞っておくとか、今回のように内容が多様だった場合、発表が終わってから共通するようなテーマを取り上げて議論するとか、手順を工夫すればもっとプロダクティブな授業になったような気がします。

岩井 朝乃（お茶の水女子大学大学院）

お茶の水女子大学と同徳女子大学の大学院ジョイント授業があると森山先生が声をかけてくださり、ジョイント授業に飛び入り参加させていただきました。私は、2002年に森山先生のご指導の下で初めて韓国を訪れ、同徳女子大との第一回の合同セミナーに参加しました。李徳奉先生が韓国の日本語教育事情についてお話しくださったこと、同徳女子大の院生の皆さんが心温まる親睦会をしてくださったことは、今も記憶に甦ります。この時の経験が一つのきっかけとなって韓国での就職を真剣に考え始め、その後、縁あってソウルにある漢陽女子大学に赴任致しました。現在もジョイント授業が継続して行なわれ、年々その内容が充実していくのに立ち会うことができることを感慨深く思います。特に今回は、三年の韓国生活を終えて日本へ帰国することが決まっており、一つの節目になる時期での参加となりました。

当日は、中国、朝鮮族、台湾の日本語教育史についての留学生の発表と、お茶の水女子大学で新たに発足したグローバル文化学環での試みについての森山先生の講演がありました。どちらも「グローバル化」という言葉に潜む、深さと難しさを含んだ内容だったように思います。韓国での私自身の経験を踏まえて考えると、海外で、特に東アジアで日本語を教えるということは、明るく楽しいことではありません。ふとした瞬間に、国同士の歴史的な経緯と国際政治の枠組みの中に自分が組み込まれていることを否応なく感じさせられます。その中で、教師として、日本人として、また個人としてどう対応するべきなのか、考え込むことは少なくありませんでした。ジョイント授業の中で、李徳奉先生が「学生たちが日本語に関わることが、彼らに何をもたらすのか」という問いを投げかけ、その結果は決して楽観的なものだけではない、とおっしゃったことが強く印象に残っています。特に、日本人と韓国人の関わりの中では、相互に言葉と文化を学び、友好的な関係を築いても、政治的な問題や歴史問題のために互いに深く傷つくことがあります。自分が日本語を教えることによって、学生たちの人生になんらかの影響を与えている可能性がある、その責任は「学生の選択」と言って済ますには重過ぎるような感じます。

今回のジョイント授業は、日ごろ避けてしまいがちな問題について、日本、韓国、中国、台湾の学生たちが率直に互いの意見を聞ける貴重な機会でした。私にとっては、韓国人日本語教師の難しい立場を知ることができたのも一つの収穫でした。また個人的には、ジョイント授業での話し合いを通して、学生に対して教師がすべきことを検討するのと同じように、外国で働く日本人教師の異文化適応や精神的なサポートについても一考する必要があるのではないかと考えました。教師が安定した状態であればこそ、学生たちに真摯に尽くし、教育に全力を注ぐことが可能になるからです。

以上、とりとめなく感想を述べましたが、日本語教育に関わる者が真剣に取り組まなければならない課題をいくつも提示されたジョイント授業でした。このような機会をくださった先生方に、心より感謝しております。

徳間 晴美（韓国外国語大学、お茶の水女子大学大学院卒業生）

同徳女子大学とのジョイント授業には、以前、修士1年であった2003年に一度参加させていただいたことがありました。当時は身近な国である韓国の教育事情や、海外での日本語教育事情について学びたいという気持ちから参加したのを記憶しています。それから3年後の今回は、現在自分が韓国内の大学に勤めていることから、ジョイント授業の2日目に突然お邪魔することとなりました。現役の大学院生や先生方の活発な意見の交換により、グローバル時代の日本語教育について考える貴重な機会となり、今この時代の中で、進むべき方向性について考えられたことが収穫となりました。

国境の枠組みを前提とした「国際化」から、その枠組みを取り払おうとする「グローバル化」へ、日本語教育広くは社会が動きつつあります。その中で、韓国は歴史認識問題などで両国間の関係が揺らぐことの多い国だけに、果たして東アジアにおけるグローバル化が可能なのだろうかと思わせられることも多々あります。話し合いの中ではグローバル化が可能であるのか、グローバル化することが最善なのかという意見のある一方で、様々な試みを進めながら、それを目指す方向へ模索しながら進んでいくことが重要なことだと感じました。日本語教育は何ができるのか、また自分自身日本語教師として何が求められ実践すべきなのかを再考する契機ともなり、今後もこのテーマを意識しながら日本語教育に関わっていきたいと思いました。

日本語教育の研究のグローバル化という意味でも、今回のようなジョイント授業は双方にとって、普段触れにくいものあるいは見えにくいものを多角的に見るという点で実りあるものであったと思います。

<韓国側>

磐村文乃（同徳女子大学大学院）

今回、同徳女子大学とお茶の水女子大学の大学院とのジョイント授業には、日本、韓国、中国、台湾といった東アジアの国々からの院生たちが一堂に会した。東アジアの日本語教育について、互いの知見を情報交換し、多角的な視点から日本語教育について考えを深めることができたのではないと思う。各々の研究成果を報告し、討論するだけに終始することなく、異文化間ワークショップを通じ、日本語教育に携わるものとして、自らの態度を振り返る絶好の機会となった。

一日目の最後に発表させていただく機会を得たのだが、参加者の出身国、関心などと照らし合わせて、あらかじめ用意していた内容を急遽一部変更し、発表することにした。できれば、インターネットやMLなどを通じて、事前にオンライ

ンで発表の内容、互いの関心などを紹介し合い、ジョイント授業に備えることができれば、一層すばらしいものを持ち合うことができるのではないかと。

今後も、国境を越え、日本語教育を志す若き研究者の皆様方と、交流、研鑽する場を共有することができれば幸いです。

倉持 香（同徳女子大学大学院）

1) 海外の大学院とのジョイント授業について

今回のセミナーでは日本、韓国、台湾、中国からの生徒が参加したため、様々な意見交流ができていろいろな角度から見て共に考える時間が取れたといえるのではないのでしょうか。残念なことに普段から、お互いの院生の交流があればもっとたくさんの意見が聞けたと思います。またセミナーにあたって同徳側でしっかりした予習と自分の意見、あるいはまとめた意見などまとめておかなかったことが残念です。

今後、メールや掲示板などで研究内容や授業の内容など連絡をとりあって、活発な意見交換ができればと思います。

2) 授業の内容について

今回の「グローバル化と日本語教育」というテーマで、授業を通して過去現在未来における日本語教育を見、それぞれの現場に携わる先生方(院生)のお話からその教育現場について理解し、知りあえる貴重な時間であったと思います。ただテーマが大きいのでは漠然としてしまいよく見えてこないこともあるので、今後のセミナーの際にはどのような見地から話しをすすめていくかがハッキリしている方がよい気がします。

佐野 澄子（同徳女子大学大学院）

今回の合同セミナーは、私にとっては初めて個人で発表させていただく貴重な機会になり、参加者の方からの温かいコメントに勇気づけられ、今後の研究の方向を考える上でとてもよい励みとなりました。

海外の大学院とのジョイント授業では、日本・韓国のみならず、中国や台湾など、様々なバックグラウンドの院生たちの刺激を受けることができる、普段はなかなか触れることのできない教授方の最先端の研究を聞くこともできる、韓国に住んでいながら個人ではなかなか行く機会のない所に行ける、ということなどが、私にはとても得るものがあったと思います。

ジョイント授業での研究発表や特別講義などで学んだことがこのまま終わることなく、今後につながることを期待したいと思います。

水口 里香（同徳女子大学大学院）

1) 海外の大学院とのジョイント授業について

海外の大学院との合同授業を行なうことによって、韓国の大学院で得た研究の視点を、より一層広げることができると思います。今回の合同授業では、お互いの院生がそれぞれテーマを出し合って、そのテーマに関する発表・討論を行ないましたが、発表を聞き討論に参加することによって、日頃、思いつかなかったような研究の視点を日本側の院生や先生から得ることができました。というのも、韓国にいながら、日本国内での問題点について考えてみるという機会がなかなかないので、今回の合同授業によって、日本国内での問題と韓国をはじめとする日本国外での問題の両方について深く考えることができ、新たな問題意識を持つようになりました。今後も定期的に、海外の大学院との合同授業が開催されることを望みます。

2) 授業の内容について

今回の授業では「グローバル化と日本語教育」というテーマをもとに、参加者全員で、今までの日本語教育を考え直してみました。この授業によって、私自身の今までを省みる時間を持つことができたと思います。私は日本人として、今、韓国で日本語教育に携わっていますが、今回の授業で「何のために、韓国に来たのか。」ということを変更して自分自身に問いかけることができ、また「日本人として、どのように韓国人学生と接していくべきなのか。」についての答え(また完璧な答えではありませんが)を見出すことができたように感じています。

森 伊作（同徳女子大学大学院）

1) 海外の大学院とのジョイント授業について

海外の大学院とジョイント授業を行うことについては、賛成します。これにより双方の考えや意見などが広い視野で見ることができ、新しい発見も出来ると思います。また、双方の教授の授業などもっと聞くことができれば、国際版ネットワークエジュケーション的なものも実現しそうな感じを受けました。今回は、2校で行いましたがもっと増やしての合同授業をしても予想できない結果が待ち受けてそうで良いと思いました。

しかし今回は、双方日本語でのジョイント授業であったので、スムーズに行えたが、これがそうでない場合は、やはり発話の理解やレジュメの理解等の難しい面も出てくるので、実際は、限られた中でしか行えないのが実状かとも思いました。

ただ、このような機会を1年に1回ではなく1ヶ月に一回程度の周期で行えば、さらに研究する題材等が自然に出てくると思うし、テクニカルな問題も回数をこなしていけば解決できると思います。

2) 授業内容について

今回は日本・韓国・中国等の日本語教育の現状についていろいろ把握することが出来たと思うし、自分自身の研究の材料になりました。今回も少し出てきましたが、今後日韓中の日本語教育の歴史認識問題についてもっとメスをいれることができるセミナーを開けば、いろいろな方向に発展できると思います。

ただ、普通の教育の実状を発表したところで、意見が出にくいというのが、一般的だと思います。しかし、歴史認識に対しては、自分の意思を曲げたくないという感情も出るだろうし、他の人がどう感じているのかということも知りたくなります。特に韓国や中国の教育現場で日本人という立場で教えていると避けては通れない問題だと思うし、自分の考えを尊重して伝えるのか、その国の立場に立って自分の考えに反して言うのかということもポイントの1つだと思います。

今後の日本語教育発展の即戦力となるようなジョイント授業をもっと開いていければ良いと思います。

黄 圭仙（同徳女子大学大学院）

この前も海外の大学院とジョイントセミナーに参加した経験はありましたが、同じ主題に対する考え方の差の壁がいつも問題点になって、結果的にセミナーが終わってもまとめるのができませんでした。

今回日本のお茶の水女子大学大学院とのジョイント授業に参加しながら、院生たちと話し合ったのは、前より内容的につながりがあるってまとめやすいということでした。今回、参加者たちは、勿論お茶の水女子大学院生ですが、日本と韓国だけでなく台湾・中国からの留学生もあって non native として日本語教育を行ないながら共感できる悩みとか、台湾・中国で行なわれている日本語教育の現況をわかるようになってよい機会でした。

しかし、今までの全ての 海外の大学院とジョイントセミナーに参加しながら問題点として感じたのは、ジョイントセミナーが1回で終わってしまって内容面で連続性がなかったのです。それで、いつも現状の発表で終わってしまって、その後の内容の発展がなかったのです。私自身も今回「国際交流と日本語教育の可能性」を発表しましたが、今回の発表では韓国の国際交流の現況だけで、交流の日本語教育の可能性はまだ課題として残っているのが実情です。今後は、今回発表された内容とその問題点、解決策などを工夫し、どんな形式であっても、また発表する機会が与えられたらもっと役に立つのではないかと考えてみました。

張 惠貞（同徳女子大学大学院）

近年国際共通語としての英語使用域の急速な拡大を目の当たりにすると、他の 言語を苦勞して学ぶ必然性が少なくなり、外国語といえば英語という時代が到達しているのではないかと、不安にとらわれる。それに対し、各地域間の関係を均衡の取れたものに保つために、文化の多様性を重視する宣言がユネスコによって掲げられた。つまり、文化の多様性が交流、革新、創造の源として人類に必要であり、多様な言語と 文化も相互に接触しあうことによって平衡が保たれ、同時に新しい発展の芽生えるということになる。言語は文化を反映するものであり、言語の学習は言語が話される国 地域における生活様式、認知体系、アイデンティティー、価値観の理解を促し、学習の過程で必然的に起こる自分の言語 文化との比較対照によって、自分の言語 文化への気づきをもたらす。それで海外との授業を行うことも交流で人間や文化などの単なる混じりあいではなく、異文化理解のプロセスであり、相互経験のやり取りであり経験の共有と言える。

今回のセミナーははじめてだったけれども、グローバル化と日本語教育についての発表を聞いて、異文化間コミュニケーションにより文化的背景が異なる人々との交流を通して、自分の価値観が普遍的ではないことに気づき、自分とは異なるものの見方を尊重する資質の養成になることが分かった。そして中国、台湾人の発表も聞いて、歴史から現在の日本語教育の現況について分かったし、日本語教育の普及のためには言語的な観点からのみ教えるのではなく、日本文化を理解させることが重要であることと教師のネットワーク作りのためでも、持続的な交流ができるようにネットワークづくりを支援することが大事であると思う。今後ともお互いに協力して合同セミナーを続けたいと思う。どうぞよろしく願います。

張 榮花（同徳女子大学大学院）

今回のセミナーでは国際交流についてさまざまな研究が発表された。さまざまな研究者達の研究の内容は日本語の学習者との立場からの私に大きな影響を与えた。特にお茶の水女子大学からの日本で長い間勉強している中国人達と台湾人達の研究の内容は私とは少し見解が異なった。

その人達と日本語を研究している同じ学習者として持っている悩みと限界を話しながらもっと勉強になった。韓国と日本と中国そして台湾の日本語教育の事情を知ることができたので今回のセミナーは日本語教育のグローバル化に役に立ったと思っている。

鄭 在娟（同徳女子大学大学院）

毎年、冬と夏になると、楽しみにしていることがあります。それは年中行事のような日本の大学院との共同セミナーであります。今回はお茶の水女子大で、この大学院とは何度も一緒にジョイントしたことはありましたが、国籍のそれぞれ違う学生達とは今回が初めてでした。うちの学校でも日本の方もいますが、お茶大の方は台湾、中国、日本の3ヶ国の院生らがいらっしや、各国の日本語教育の事情に関する活発な発表もできて「グローバル時代の日本語教育」という今回のタイトルにふさわしいセミナーになったと思います。

特に、特別講義であった李先生の「日本語教育を活かすリソースリテラシー」を注意深く聞きました。今までリソースリテラシーという単語を何度も耳にしたことはありますが、その意味がはっきり分かりませんでした。それで、今度その概念をつかみました。李先生はリソースリテラシーを活かして「交流」の場を作る日本語教育の実現が望ましいとおっしゃいました。それからリソース活用に関する色々な方法もいくつか紹介していただき、それはこれからの私の日本語教育の方向の一つの提案になったと思われまます。

また、興味をもっておもしろく耳を傾けたのは、3人のお茶大学院生らの「台湾における日本語教育」についての発表でした。それは台湾での日本語教育のようなもので、全然知らなかった歴史を初めて接触する機会でした。その他に、韓国のデク市の実践報告、中国の日本語教育、中国の朝鮮族の日本語教育の歴史などもよく聞かせていただきました。韓国での日本語教育にしか把握できませんでしたが、このセミナーを通して韓国以外の国の事情を少しでも分かったような気がします。

本人は毎年開かれる共同セミナーに大満足しています。一つの方向にだけ走って行こうとする狭い視野や考え方などをもっと広げてくれて、自分の日本語の教え方も新しく見直す大切な時間だと思います。

金 賢熙（同徳女子大学大学院）

1) 海外の大学院とのジョイント授業について

今回、日本のお茶の水女子大学院生との共同セミナーは、いろいろな意味で考えさせるものが多い授業でした。もちろん、以前何回か、日本の大学院生との共同授業はありましたが、今回のセミナーのテーマが持つ働きかけは、とても印象に残るものでした。グローバル時代とはいえ、隣国である日本と日本人について知る機会、普通の学生たちにはあまりないと思います。そのため、日本語を教える教師という立場から、私自身、果たしてどこまでよく知っていて、また、ちゃんと理解できているのか、普段気になっていました。

今回は、日程は短かったのですが、私と同じく日本語教育をめざしている中国の留学生、台湾の留学生、さらに日本の大学院生を混じえて、4つの国の大学院生同士の討論ができました。とても印象的で、勉強にもなりました。

それぞれ、国籍は違ってもアイデンティティーを考えながら、これから新しい時代に向け、日本語教師として学生たちに何を教え、また教師としてどのような試みをしていくべきなのか、話し合ったり知らなかったそれぞれの国の日本語教育の実情を知ったりすることもできました。

もしこのような海外の大学院生との共同授業を定期的に行うとしたら、授業の計画、経費の問題など、もう少し具体的にフォローしてもらえる支援などがあれば、もっと効率的に持続できるのではないかと思います。

2) 授業の内容について

共同授業は、主に韓国の同徳女子大学院生と日本の大学院生の研究発表を聞き、その内容に関する討論を行いました。主なテーマはグローバル時代の日本語教育について考えるものでしたが、日本や中国、台湾、韓国、この4つの国で行われている日本語教育の実情を知ることができ、また、交流を日本語教育にどう生かすのか、また、日本語教師として今後、どのような役割と働きかけをしていくべきなのか、国籍は違っても自分の考えをありのまま、話し合う場面もありました。

金 世恩（同徳女子大学大学院）

大学院に入ってきて、今まで毎年1~2回日本の大学院との合同セミナーに参加してきました。毎回、様々なテーマでセミナーが行われました。日本の大学院の方々と交流することでいろんな意見を聞くことができ、みんなで同じことについて考えてみるという点ではとても有益なセミナーであったと思います。しかし、本当に彼らと交流をし、わかり合おうとしたのかということについては疑問が残ります。意見の差を感じながらギャップを確認することで終っていたような気がします。やはり日本人は日本中心に物事を考え、他の人はどう考えているのか知りたいと言いつつも、こちらから見れば「本当にそう思っているのかな」というふうな気がします。私の表現が具体的ではないので、多少わかりづらいつつも、毎回セミナーが終ると、「彼らは何をしに来たのだろう」というのが率直な感想でした。期間が短くて、互いにとけ込んだ雰囲気を作り出すこと自体が無理なことかもしれませんが、その前に、セミナーに臨む参加者自身が心を開いて、相手と本当に交流する気持ちがあるのかということがまず問われなければならないと思います。そのためには、何が必要なのか、どうすればいいのか、ということがこれからセミナーを主催する方々の課題ではないだろうかと思われま

金 璇姫（同徳女子大学大学院）

1) 海外の大学院とのジョイント授業について

うちの同徳女子大学院は毎年日本の大学院とも共同授業やセミナーを行っている。お茶の水女子大の場合は冬休みの時に交流を続けている。いつも同じメンバーで勉強するよりは新しい環境でしかも外国の大学院生と交流することは新鮮な経験である。同じ学問を研究している人同士に共通して自分の思っている点や最新情報を交換するのはお互い得になるのではないと思う。しかし、日本と韓国の休み期間が合わなくていつも日本のほうは期間テストが終わってからすぐ韓国へ来るようである。で、共同授業のテーマについて十分理解していなかったりする。韓国のほうも日本との連絡不在、テーマにかんする理解不足はいつも問題になっている。共同授業はそれをやっただけでも意味はあると思うが、もっとよい結果を出すために交流の準備段階からお互い打ち合わせを十分する必要があると思う。ある一方だけの関心や連絡だけではなく、個人個人が共同授業をする意味をまず理解しなければならないと思う。今までとは違って今回のお茶大の時には日本人より中国人・台湾人など日本で研究している外国の人と話すのができてよかったと思う。日本人は感じていない外国人学習者・先生の立場を少しわかってもらえたと思う。これからは交流を重ねるたびに他の世界にもっと積極的に接してみたい。

2) 授業の内容について

今回の共同授業のテーマは世界各地（韓国、中国、台湾、朝鮮族）での日本語教育の現況であった。韓国の立場は説明しなくてもよいほど体で感じているが、中国の日本語教育は韓国とは違うことが分かった。同じ東洋の国でも学習者の性向、教育環境、国の外国語政策などによってあまりにも差がある。また中国で直接中国人対象の日本語教育をしている人の意見を聞いたのもよかった。しかし、自分の立場だけをおだてたり、ほかの地域の現況報告の内容に同意しなかったり（根拠なしに）するのはこれから改善すべきだと思う。もちろん自分の経験が一番大事だとは思いますが、反論したり自分の主張をしたりするときには根拠資料が要ると思う。少し残念だったのは日本での外国人向けの日本語教育の現況が聞けな

かったことである。アジア諸国の事情は分かっても、日本語教育の本場である日本での日本語教育の現況を知りたかった。次の機会にはぜひ日本国内の事情も聞きたい。

申 恩 浄（同徳女子大学大学院）

1) 海外の大学院とのジョイント授業について

日本語教育の目指している究極的な目的を考えることにおいて異なる観点からの意見交換の必要性を認識するためには海外大学院とのジョイント授業は非常に意味のあることだと思う。

しかしながら、海外大学院とのジョイント授業がこれからの日本語教育においてもっと有意義なきっかけになるためには合同セミナーの進行形式と内容について十分な事前協議が行わなければならないと思う。

合同セミナーの成功の可否は参加者のセミナーの主題についてのはっきりした認識と準備過程によって決まるのでセミナーの準備段階から多様なネットワークを通じて意見交換を行い、交通の主題が決まったらセミナーの内容を構成するために積極的な事前活動が必要だと思う。

2) 授業の内容について

東アジアの各国で行われて来た日本語教育の特性を考察し、このように多様な観点を持つしかなかった各国の歴史的な背景についての研究する必要性を感じることができた。

グローバル化と日本語教育という主題に関して具体的な方法を論議したと言うより日本語教育を実施することにおいて教育の理念及びそれが目指しているのが果たしてなにかという根本的な問いについて考えてみる時間だったと思う。